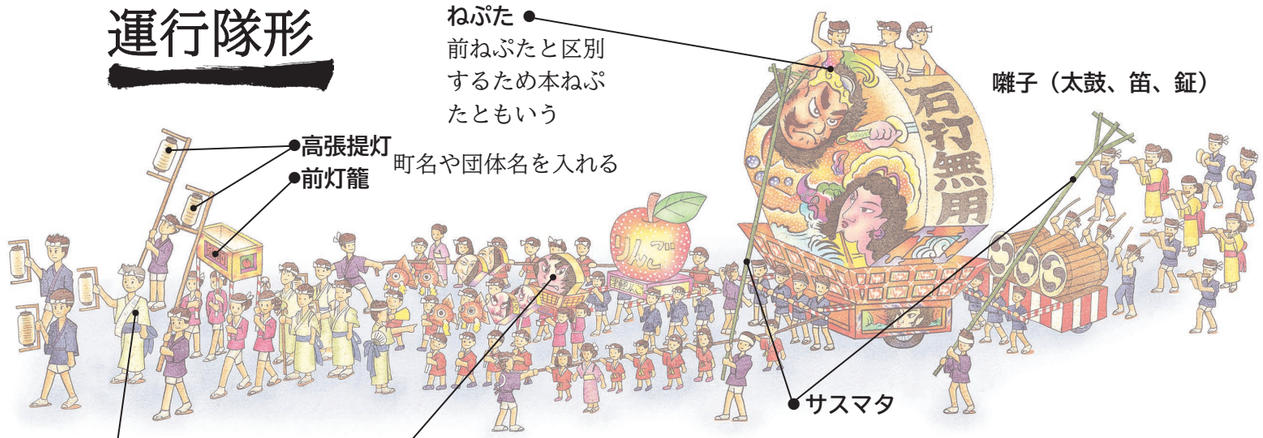
運行隊形



※ねぷたの伝統を踏まえて、次のような役割を残している運行団体もある。
サスマタ（ねぷたが電線に引っかからないように電線を持ち上げる道具）／ササラ（照明がロウソクだった頃の消火用の道具）／ほら貝（出発の合図）／錫杖など

参考：弘前ねぷた本（弘前観光コンベンション協会／弘前ねぷた保存会）、新編弘前市史（弘前市）

弘前ねぷたへの思い

地域あっての弘前ねぷた

茂森新町ねぷた同好会
会長　小山内（おさない） 稔（みのる）さん

茂森新町ねぷた同好会は、昨年で46年連続出陣となりました。毎年、資材小屋からねぷたの骨組みを運搬し、今でも木製のボルトを留めて組み立て、絵貼りまでみんなでやります。子どもたちにも、ねぷたはこういう風にできているんだよと見せながら。そうすることによって、子どもたちも自然と分かっていきます。

ねぷたの製作から、囃子の練習、運行まで全てを行うことはとても大変ですが、それが地域住民主体となって行われ、またそのような地域に根差したねぷたの団体が、現在に至るまでたくさん受け継がれていることが弘前ねぷたのすごい部分だと思っています。また、何よりねぷたを通しての楽しさがあります。これからもみんなで一緒に楽しんでいきたいです。

運行は特別なことはしようとせず、重要無形民俗文化財としての「弘前ねぷた保存基準」にのっとり、昔から継承されてきた運行隊列を守っています。例えば、サスマタやササラなど現在少なくなった道具の使用など、持ち物を含め、先頭の町印から最後尾の囃子までこだわっています。隊列のさまざまな役割を分担し、現代ではなじみのない伝統的な知識や感覚に触れることは、弘前ねぷたの伝統を後世に伝えるためにも大切なことだと考えています。

年々参加者は少なくなっていますし、熱心な若い人でも進学や就職によって県外に行ってしまうことも増えました。担い手不足は、今後弘前ねぷたが続いていく上での大きな課題です。伝統文化を守りながら楽しむ。今年は活力をためて、次回に向けて備えたいです。

▲昭和55年撮影。参加人数が多すぎて子どものみを写した集合写真

受け継いでいきたい伝統の音

伝統ねぷた囃子津軽組
伏見（ふしみ） 要（かなめ）さん

伝統ねぷた囃子津軽組は、弘前ねぷた囃子の後継者育成を目的とした会です。毎年ねぷたまつりの時期を中心に講習会を開いており、そこで40年以上、笛や太鼓を教えています。

会では、弘前ねぷた保存会の「弘前ねぷた囃子楽譜集」の囃子を基本に、変わらないように継承していくことを重視しています。また、弘前のねぷたは威風堂々と戦に向かう様子を表しているもので、私の原点もそこにあります。私としては、そういった囃子が伝統として受け継がれていって欲しいです。同時に、基本がしっかりと変わらずに受け継がれてるのであれば、個性としての変化というのは、見る人を楽しませようとする思いから生まれたものであるので、それはそれでいいと思っています。

ねぷた囃子というよりは、やっぱりねぷたそのものが好きで、理由については言葉で言い表すことは難しいですが、自然と好きになる環境で育ったことは確かです。

▲津軽の夏の音風景

小さいころは、ねぷたの時期になり大人が作業を始めると、自分でも持てる小さい材料を持ちはじめ、小屋づくりから手伝ったり、額絵をもらってうれしかったり、うまい人の笛をまねようと試行錯誤したり。今でも、作業中のねぷた小屋に興味を持って近づいてくる子どもがいると懐かしく思います。

毎年、講習の人数は少しずつ減ってはいますが、自分が教えた人の中から、教える側になった人も出ています。また、私が子どもの頃は、自分でうまい人を探して、見て、聴いて覚えましたが、今は楽譜もあります。きっかけがあれば誰でも覚えることができる環境が、昔に比べ整っていると前向きに思っています。これから参加してみようという人、大歓迎です。

勇壮で品格に裏打ちされた絵

ねぷた絵師
三浦（みうら） 呑龍（どんりゅう）さん

弘前ねぷたは、山車・囃子・運行が一体となるところに良さがあります。その中で、ねぷた絵は決して山車を飾る目的のものではなく、絵を見せる目的の山車だというところに意義があると考えています。

扇ねぷたが定着した理由として、歴史的には、組ねぷたよりも費用が掛からなかったからという理由が挙げられますが、私としては、やはり迫力のある武者絵が、城下町で武士の気質を持つ弘前の人に合っていたからこそ、今まで続いているのだと思います。

絵を描くにあたっては、まつりの中でたくさんの人に見られるものなので、「客観性」を意識しています。合同運行時、数多くのねぷたの中で目に触れるのはほんの一瞬です。しかも、できるだけ多くの人に印象を与え、記憶に残っていく。このことが大事なことだと思っています。

▲紙と筆だけで迫力を生み出す

また、ねぷたの絵は、江戸時代後期の葛飾北斎や歌川国芳、武者絵の先駆者たちの武者絵等を引き継いでいます。彼らのような勇壮で、品格に裏打ちされた絵を受け継いでいきたいです。

例年、ねぷたまつりが終わると、すぐに次の年へ向けて1年単位で準備を始めています。毎年楽しみにしている人がいるからこそ、今年はまつりがなくとても残念に思います。だからこそ、気持ちを切らさないようにしていき、それだけの思いや期待に応えられるような良いねぷたを描きたいです。